

南アフリカ近況報告会のご報告

_____ キンバリー女性発展センターを訪ねて

講師: アフリカ民族会議(ANC)スタッフ

内田 直子 氏

- ◇ 8月に南アに出張し、日本から送った古着の配布の様子を見たり、6月に「アジア・アフリカと共に歩む会」が講師として招いたユニス・コマネさんの女性発展センターを訪ねてきました。

アフリカ民族会議(ANC)とは

私はANC、アフリカ民族会議という所で働いています。そこの仕事でこの夏、南アに3週間ほど滞在しました。話の内容については、この「アジア・アフリカと共に歩む会」が英語の教科書を送っているキンバリーの女性発展センターのこと、また1年前から南アに古着を送るプロジェクトを千葉と神戸を中心に行なってきましたが、その結果を報告させていただきたいのと、もう一つ、南アフリカでなぜ古着を必要とする人たちがいるのか、ということに関連して、今、南アで起きている暴力事件の背景についてお話したいと思います。

始めに、ANCとはどういう組織かということをお話します。アパルトヘイトを廃止するために各黒人グループを越えて統一して、1912年に設立されました。もともとは民族解放組織のグループなのです。南アフリカは黒人を10のグループに分けていますが、そのグループを越えて一つの民族解放組織として統一されたものなのです。ご存じのように南アフリカでは、アパルトヘイトという法律によって、黒人は貧困の生活を強いられたり人権が守られない生活を強いられてきたことに対して、抗議行動、デモなどをまず平和的な方法で行なっていました。ロベン島の政治囚の刑務所に27年間投獄されていたネルソン・マンデラ(現在のANCの議長)が、1990年10月に来日しました。彼が青年同盟の一人として活躍していた1960年頃には、パス法というのがあるが、黒人はいつも身分証明書を携帯していなければ逮捕されるという法律がありました。このパス法に反対して、市民の69人が殺されるという大きな事件がありました。この事件ののち南ア政府は非常事態宣言を布きます。ANCを含むいくつかの組織が非合法化されました。反アパルトヘイトの運動のために、ある時期は武装闘争を展開していました。

去年の12月にCODESA、民主南ア会議、民主的な南アフリカを目指す会議が開かれ、今年の6月には2回目が開かれ、今月末に3回目の会議が開かれる予定です。これまで同じテーブルに付くことのなかった黒人、白人、インド人、(中国人、マレーシア人)またカロードと呼ばれる混血の人々がCODESA-1という会議で、一堂に会しました。デ・クラーク大統領との間の交渉でもANCは大きな役割を果たしています。

ANCの東京事務所は南アの紹介をしたり、アパルトヘイトの実態を日本の方々に知っていただくということが大きな役目ですが、そのほかに南アの草の根の運動の援助をしています。

キンバリー近況

- * ヘレン・ジョセフセンターの敷地です。ここに建設中です。
- * センターが行なっている識字教育の様子です。
- * 識字教育を行なっている建物で今はローマンカトリック教会から借りています。
- * これは菜園プロジェクトの一端です。
- * 建設中のセンターの建物です。これから仕切りをつけて2階建てになる予定です。
- * ダーバンという所です。南アには黒人のインカタ・グループというのがあって、AN

Cをしばしば襲います。これはインカタに襲われた跡です。彼らはこのようにめちゃくちゃに破壊するか、焼いてしまうかします。そして中に入ったものを全部、持ち去っていきます。

* これもインカタに破壊されたあとです。

* キンバリーのあたりはもともと乾燥した土地ですが、特に今年は早魃がひどくて木がこのように白色になっています。

* 南アのボプタツワナの家の中です。多くの黒人はこういった家に住んでいます。水道も電気もトイレもありません。家の外に穴を掘ってトイレにしています。共同の水場から毎日運びます。

* インカタの襲撃によって家を失った難民がモスリム教会の寄付によるテントに生活している所です。何百人もの人々がこのテントで不自由な暮らしをしています。

女性の自立を目指す発展センター

キンバリーの女性センターの指導者であるユニス・コマネさん(顎:右)が6月に来日し、彼女とのコンタクトで「アジア・アフリカと共に歩む会」の教科書送付の活動も始まったのです。彼女が携わっているヘレン・ジョセフ女性発展センターについてお話したいと思います。

南アには、南ア政府だけが外国であると、みなしているけれど、どこの国もそれを認めていない場所があります。それはホームランドといい、黒人が強制的に住まわされた場所です。一つのホームランドがあちこちの荒地に点在させられ、このセンターもボプタツワナというホームランドの近くのキンバリーという所にあります。

キンバリーはほとんどが農村地帯で乾燥していて、人口密度が高い地域で、ダイヤモンドで有名です。しかしキンバリーの貧しさは昔からずっと変わっていません。住宅の不足、栄養不足、教育の貧困などが深刻です。

その中で活動しているユニス・コマネさんのグループが考えることは、まず女性が向上するためのプロジェクトが必要だということです。教育施設の貧困が大きな原因ですが、黒人女性の自立と社会参加のためには、働く場所がまず必要になってきます。働くためには、働くための技術や、技術を得るための教育の保障が必要になってきます。このセンターの中心的な活動は、成人のための識字(字を覚えること)の運動です。南アの非識字率は60%以上になるということです。もう一つは保育園を作ること。三つめは菜園のプロジェクトです。地域の食糧の確保と、売って収入を得ることを目的としています。もう一つはコミュニティ、学級による住民の意識改革です。黒人たちはアパルトヘイトの教育を受けてきたので、自分たちは白人に劣っている、だからこういう生活をしているのも当然である、と信じこまされてきたのです。そこで人権、民主主義とは何か、ということを中心に生活の中から取り上げて、意識の啓発を行います。また近い将来の総選挙のやり方も学習します。選挙のためにも識字教育の意義は大きいのです。

このセンターの運営はヘレン・ジョセフ女性発展センター基金と日本の反差別国際運動日本委員会(IMADR・イマドラ)の共同で行なわれています。現地でも財団などの援助プログラムがあって応募していますが、競争率が高くなかなか難しいようです。そのほかNGOの組織から多少援助があります。いずれにしても必要な経費にはほど遠い実情です。

私の見た識字クラスは、ABCから学習していました。35才より上の人たちで英語が読めない書けない人たちです。少し書けて読めるようになった人たちのための本がないので



この会の方々が送られている本がとても重要な意味を持つと思います。また黒人の学校の図書室の本が極端に不足していますので、簡単に読める絵本のようなものがとくに必要とされています。今このコースは6週間で終わりますが、その先のコースのための教師養成の資金が不足していて、要請に応えられない現状です。学習していた一人の女性は「今まで駅の名前も読めなくて不自由していたが本当に助かった」と言っていました。

菜園プロジェクトは私が行った時は、庭師の人が試験的にサンプルを作っている段階でしたが、今はもっと進行していると思います。

建物は予定としては、10月いっぱい出来上がって、いろいろな活動が始まります。プロジェクトとしては具体的にはパンを焼く、ブロックを作ることなどから収入を得ることを考えています。

去年の今頃から南アに古着を送るプロジェクトが始まって、反アパルトヘイト運動のグループの方や新聞を見て集まって下さった方々が千葉と神戸を中心に倉庫を借りて、たびたび集まり、仕分けをしたりして結局、りんご箱で5000箱の衣類を送り出すことができました。南アフリカでは、とくにナタール州を中心に暴力事件が多く起こっています。暴力事件によって家を失った人たちに特に衣類を渡したいということで始まったのです。

一番、懸念されることは、港からの輸送手段でした。トラックはたいへん高いのです。しかし、私が行った時は、一部はANCに置かれていて、一部は必要な所に確かに配布されていて安心しました。現地の人たちはまだまだ古着が足りない、ブランケットをぜひ送って欲しいということでした。先のスライドで見えていただいたテントで生活する、家を失った人たちは公園の土の上に寝ているわけです。

南アフリカの暴力事件の背景

インカタという黒人のグループの襲撃によって住んでいた所から逃げなければならなくなり、難民となった人々がたくさんいます。その人々は職もなく、赤十字とオペレイション・ハンガーという援助団体が、たまたま私の訪ねたキャンプでは食事の世話をしていました。

なぜインカタがANCを襲撃するのかといいますと、黒人居住区にいる住人をインカタ・グループに入れたいという目的があるのです。インカタの人は一家族を殺すと、5ランド(225円)もらえるのです。インカタに入るともう襲撃を受けることがないわけです。襲撃の危険があると分かっても、なかなか逃げることはできず、犠牲になっている家族がたくさんいます。

1990年にアパルトヘイトの主だった法律が廃止されました。私が1990年に南アを訪ねた時と、ついでこの間行つた時とを比べてみると、良くなったというよりは、むしろ悪くなったのではないかと思われました。ネルソン・マンデラが釈放されたことで、人々は大きな希望と期待、解放感をいただきましたが、現実には何も変わらないということによって、フラストレーションがたまり、ある場合には、やけっぱちになる人々もいます。

日本の新聞報道では、インカタの暴力事件を黒人間の対立であるとして白人とはまったく関係がないように扱っていますが、事実は違うということを知っていただきたいと思います。

今年、ボイボトンで事件があり、49人が殺され、日本の新聞にも大きく取り上げられました。その直前に300~400人のインカタの人間を警察がトラックで運んだり、事件の指揮をとったり、直前の警察の無線の交信が消されている、などの事実が判明しています。

どういう人たちがインカタかという、いちがいにズールー族 = インカタとはいへ

南ア軍情報機関が裏工作
11月17日【アフリカ支局17日】南アフリカ共和国の黒人組織や政府治安部隊などを巻き込んで多発する暴力事件について、政府から独立して調査にあたる司法調査委員会議長のゴールドストーン判事は16日、軍情報機関の最高幹部が殺人などの元服役囚を雇い、黒人解放組織「アフリカ民族会議」(ANC)の軍事部門「民族のやり」がいろんな犯罪に関与しているよう見せかける裏工作を行っていた、と発表した。
裏工作の時期は、すでに政府とANCが新憲法制定を目指して交渉を始めた後にあたる。
書類によると、軍情報機関参謀長らが、昨年5月から12月まで、2件の殺人罪などで服役した元警官を雇っていた。

ません。炭坑の労働者の単身用宿舎があり、一方に黒人居住区の人々がいます。たとえばソエトの黒人居住区の住民は、白人居住区に出かけて行って、掃除夫やレストランの仕事などを1940年代からしてきましたので、住民としては2世、3世も多いのです。一方、単身宿舎の方は、田舎から出てきた人が多く、互いになかなかコミュニケーションがなかったようです。ソエトの人々のストの計画などがうまく伝わらなかったりして、スト破りと見做されたりすることもあったようです。

これら黒人間のすれ違いを上手に利用したのが警察であり、政府であったのです。昨年、インカタに資金や武器を渡したという事実が明るみに出ました。警察のほかに、1979年に作られたスクワットという特殊部隊があります。これらがインカタの暴力に深く関わっています。

南アの今後は民主南ア会議(CODESA)にかかっていますが、南アの人々が何を望んでいるかという点、一番最初に暫定政権をつくることです。その後、黒人の人たちが一人一票を持ち、新しい政権をつくることです。

援助は、人々が自立していける援助が必要だと思います。人々が人権を主張できるようになり、それが守られる、そういう支援が必要になってくると思います。

先々、一人一票制が確立され、選挙が実施される時に、日本からもモニターとして監視委員が派遣されることが考えられますが、援助とは別に私たちは、日本政府がどのような立場をとるのか、私たちはどうすべきか、いつも考えていきたいと思っています。

以上

今、会の中心で活動している人たちの感想

LITTLE CHANGE MY LIFE

浅見 克則

会社員

ニューヨーク市庁舎、福祉課で生活保護費を受け取ったある黒人女性はためらわずに2階下の寄付課に寄って貰ったばかりの生活保護費から10%を寄付した。近寄ったテレビレポーターから突き出されたマイクに向かい、彼女は少しはにかんで「更に貧しい人のために・・・」と答えた。

テレビの前の私は痛く感動し、同時に少ない収入を自身で呪っていた自分に赤面した。折しも知人の野田さんがアフリカに古着を送るボランティアを呼び掛けていた。限られた小遣いからの寄付は骨身にしみる。ところが幸いに親から貰った丈夫な身体。これを使って労働奉仕を申し出る事にした。ニューヨークの黒人女性に困って生活の10%位を奉仕に当てる決心をこの時した。こうして私の内なる改革は始まった。

ごまかさず、取り組みたい

下谷 房道

高校教員

大学時代に所属していたサークルが、楠原彰先生を招いて講演会を行なったことがある。その時に初めてアパルトヘイトを自分の問題として考えた。以来、10年の時間が経ってしまったが、その間、ほとんど何もできなかった気がする。地元で活動できる条件に今、ごまかさず取り組んでいきたい、と考えている。

遠い国の友人として

松本 富美江 会社員

私がこの会を知ったのは、私自身何かできることはないかと探している時でした。この会に参加するにつれて、今まで漠然としていたものが少し見えて来たように思います。その一つが、人の役に立ちたいと思うなら、その機会が来るのをただじっと待つのではなく、自分から関心を持ち、一歩踏みだしてみようということです。

アジアはいざ知らず、アフリカは私にとって遠い国でした。会を始めるにあたって、私はアジアやアフリカの現実をほとんど知らないということに気付いたのです。というより、新聞やテレビでのニュースを身近なものとして感じていなかったと言うべきでしょうか。アフリカについての本はすでに何冊か読み、アジアについての知識も深めるよう、今、努めています。会での活動を通して、例えば今やっている南アフリカに教科書を送る活動を通して、“実際に”人に役に立つことができるんだと感じています。もちろん私の小さなグループはほんの少しの助けしかできませんが、それでも、こうした活動を通して隣の人に手を差し伸べることができるのです。憐れみや同情からだけではなく、遠い国の友人としてこれからもアジアやアフリカに関心を持ち接していきたいと思っています。

黒人が受けている差別に憤り

吉田 妍子 元中学校教員

戦後、我が国は目覚ましい発展を遂げ、町には物が溢れ、欲しい物は何時でも手に入るようになりました。そのため、私たちは戦争やその直後の物不足と飢えに苦しんだ事も忘れ、あまりにも恵まれた現在の環境を当然の事と思い、感謝の気持ちを失っているのではないのでしょうか。新製品が出るとすぐ目移りして、まだ使えるのに惜し気もなく捨ててしまったり、また、TVのバラエティ番組で食物を投げ付けたりしているのを見ると、「これでいいのか」と考えさせられるものがあります。

一方、世界に目を向けてみると、今でも、アジア・アフリカの一部の地域では飢えと貧困に苦しんでいる所があります。南アフリカでは黒人の多くの人がアパルトヘイトによって悪い住環境に置かれ、十分な教育も受けられません。（デクラーク大統領が、先日来日した時にアパルトヘイトは廃止したと言っていますが、現状は以前とあまり変わっていないようです。）我が国では、これらの地域の情報が少なく、関心を持っている人も少ないように思われます。私は1990年にネルソン・マンデラANC議長が来日して、ニュースステーションに出演された時、黒人が受けている差別の事を知り、憤りを覚えました。同時に我が国の贅沢な暮らしぶりを恥ずかしく思いました。

世界中の人々が等しく教育を受け、生活を向上させられるようにならなければならないと思います。子育てが終わり、時間に余裕ができた今、これらの地域の人々のお役に少しでも立てればと思いこの会に参加しています。多くの人々のご協力を頂けますようお願いいたします。

皆さん、教科書・本と支援金の寄付を ありがとうございました。

「アジア・アフリカと共に歩む会」代表 野田千香子

◇ 現在までに約6000冊が全国から届き、すでに1000冊を発送しました。今も少しずつ梱包し、送り出していています。また、現在までに運営費を含めて40万円の寄付をいただいています。しかし、送料はまだ不足している状態です。

◇ 先日、来日中のノクゾラ・マギダさんにお会いしました。彼女はアパルトヘイト下の南アの農村で、この10数年、政治を表に出さずに農村女性の経済的自立を促すセンターの活動を地道に発展させてきました。例えばヒヨコを育てて売ること、パンの焼き方を覚えて収入を得ること・・・などです。来るべき総選挙（黒人が一票を持つことが黒人の願いです。今はノーベル賞を受賞したツツ司法も一票の権利を持っていないのです。）のためにも成人に対する英語の読み書き教育が必要です。

ノクゾラさんに日本の中1、中2の教科書や読み物を見てもらったところ、「すくなくとも、いくらかでも欲しい。周りの中・高校の図書室も空っぽです。」とのこと。さっそく送ることを約束しました。

◇ 12月にIMADR（国際民間救済機構）の松本めぐみさんがヘレン・ジョセフ・センターを訪れ、2週間滞在します。会では文具類を松本さんに持って行っていただきます。教科書がすでに届いているとよいのですが、松本さんの帰国報告が楽しみです。

◇ 日本からの英語の本が決して理想的とは言えませんが、当面はとにかく役に立つということですので、南アの状況をみながら、このやり方を続けていくつもりです。

送り先は、キンバリーのヘレン・ジョセフ女性発展センター（ユニス・コマネさん）とトランスカイのインナンバ地域開発センター（ノクゾラ・マギダさん）の2カ所です。

◇ 教科書一冊の送料が平均70円強かかります。またアパルトヘイト政策で多くの権利を奪われていた彼らが、経済的にも精神的にも自立していくためには、当面は運動を支える私たちの支援が必要です。引き続き、支援金、送料の寄付をして下さるようお願いいたします。なお、教科書と本を送付して下さる際は、一時的保管場所の関係上、前以てご連絡下さるよう、お願いいたします。（数冊以下の場合は直接お送り下さって結構です。）支援金は一口1000円からお受けしております。



ノクゾラ・マギダさん

1947年生まれ。高校教師であった1970年代初めから、ステープ・ビコらと黒人意識運動のリーダーとして活躍する。78年から、暗殺された父の後を継ぎ、インナンバ地域開発センターで働く。

1992年12月1日発行 「アジア・アフリカと共に歩む会」